

6 章 2014 年度 COC 事業広報関連資料など

COC 事業ニューズレター2014 年冬号

COC 事業ニューズレター2015 年春号

第 73 回日本公衆衛生学会総会 発表ポスター

大学から地域へ 文部科学省 COC 整備事業：続報

(学報『回廊』第 12 号 pp.2-3 から転載)

学内エントランス部掲示物__COC 事業計画パネル



市看×いちかん ちいき通信

2014年 冬号

2014年12月10日 発行

今号の内容



- P1. 共に創るコミュニティケア
・COC コラボ教育
 ピックアップ
- P2～3. COC フォーラム
・地域の顔
 (竜が台地区
 高橋千栄子さん)
- ・行政の地域づくり・
 健康づくり
 (北須磨支所保健福祉課長
 後藤靖さん)
- ・コラボ教育での学び
 (2回生 島田和史)
- ・COC研究ひろば 第1回
 (学長 鈴木志津枝)
- P4. 活動予定

“いちかん” (い) 一緒に、(ち) 地域づくりについて、(かん) 考える をコンセプトにしています。

共に創るコミュニティケア

神戸市看護大学地域連携教育・研究センター准教授 相原洋子

社会におけるネットワーク、信頼、規範や凝集性といった特性を表す、「社会資本（ソーシャル・キャピタル）」と健康との関連は、1990年代以降、国際的に注目を浴びてきました。わが国でも2013年に国の健康政策である「健康日本21 第2次」に、このソーシャル・キャピタルの醸成が目標として掲げられるようになりました。まさに健康づくりのカギは、「地域づくり」にあるといえます。

このたび創刊されることになりました本紙では、本学「地(知)の拠点整備(COC)事業」の活動報告以外に、地域住民の方、協力自治体、そして本学の教員と学生が、それぞれの立場で「地域づくり・健康づくり」に関する記事を掲載する、「COCフォーラム」を設けました。

本紙標題の「市看×いちかん ちいき通信」の「市看(いちかん)」は、本学の略称(愛称?)。そして「いっしょ(一緒に)に、ちいき(地域)づくりについて、かんがえる(考える)」のコンセプトを略した「いちかん」をかけあわせることで、本学が地域の健康づくりの活動拠点となることを願い、命名しました。この紙面を通して、官学民がつながり、ソーシャル・キャピタルが醸成され、「共に学び 共に創るコミュニティケアの拠点づくり」の実現を目指していきたいと思います。「市看×いちかん ちいき通信」発進(発信)にあたり、皆様の地域づくりにかける熱いメッセージをお伝えしていきます。

COCコラボ教育ピックアップ～2014年秋実施分から～

地域住民の暮らしを理解できる看護人材の育成を目指し、住民の皆様には授業協力者として参加いただく「コラボ教育」を実施しています。今号では10月に行われた基礎看護技術演習Ⅰ(1年生)、「睡眠を見直そう! 休息・睡眠を促す援助: 生体リズム、生活リズム」をご紹介します。15名の住民の皆様にご協力いただき、生活リズムや睡眠について、学生と住民参加者のそれぞれの違いについて意見交換を行いました。写真は意見交換の様子です。「とても有益でしたし、若い方の生活がよくわかりました」「若い学生さんたちに囲まれて、何歳か若返ったような気がします。睡眠時間が平均より短いのに気がきました」と住民参加者の声。「同じ睡眠時間をとっている人がいても、人それぞれ違うリズムがあるとわかりました」「年を重ねるごとに、睡眠時間やサイクルが変わると知りました。自分の生活をみつめ直す良い機会になりました」と学生からの感想があり、生活リズムについて考える有意義な演習となりました。次回からも続けてご紹介しますのでお楽しみに。

(神戸市看護大学地域連携教育・研究センター助教 石井久仁子)

【地域の顔】 ～コラボ教育に参加して～

須磨区竜が台地区民生委員児童委員協議会 会長 高橋千栄子さん
 竜が台では、市看護大学からコラボ教育のお話を頂いた時に、「私たちにどんなお手伝い出来るのか？地域の方にどんな事業が受け入れられるのか？」を考えてみました。他地区での様子も伺いながら出した結論は「地域の保健室」の開催です。学生の頃、体調に不安を感じた時に行ってみようと思った“保健室”のイメージでした。

地域福祉センターからは、色々なイベントの情報を発して来ましたが、関心を持って頂く事が少なく参加も少ない状況でした。

「地域の保健室」に何人の方が来てくださるか？どんな方が来てくださるか？不安な気持ちがある中、6月と7月に全10回の「地域の保健室」を開催しました。開催してみると、意外な事に初めて福祉センターに足を運んでくださる方もあり、のべ200人の方に参加頂いた事は嬉しい驚きでした。参加された皆さんからのご意見で、皆さんの健康志向の強さを知る事が出来、また、情報の伝達方法の大切さに気付かされた事は大きな収穫でした。

「地域の保健室」実施にあたり、市看護大学の先生方、たくさんの学生さんにご尽力をいただきました。お疲れ様でした。ありがとうございました。立派な看護師さんに成長されることが、参加された皆さんや私たち（民生委員）の願いです。学生の皆さん、頑張ってください。



基礎看護技術演習Ⅲ

学生とお手伝いで参加くださった民生委員さん（筆者は右端）

【行政の地域づくり・健康づくり】

～地域の力と情熱があふれる住みよいまち～須磨～

神戸市須磨区北須磨支所 保健福祉課課長 後藤靖さん
 須磨区では、須磨区計画「地域の力と情熱があふれる住みよいまち～須磨～」に基づき、須磨区の個性を活かした市民の健康づくりを応援してきました。例えば、地域の個性を活かした健康づくりを進める「健康づくりリーダーの活動支援」「須磨いるウォーキング講演会」、健康づくり情報の収集・発信を行う「健康づくり情報一覧」の発行、まち歩きを楽しむ環境づくりのための「須磨いるウォーキングマップ」の作成などを行ってきました。

今年度、介護保険法の改正が行われ、介護保険制度の見直しがされています。高齢者が重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指しています。一方で、介護が必要になった時の支援も大切ですが、要介護状態にならないよう、また、重度化しないよう介護予防が何よりも必要です。その中で、地域での健康づくり活動の重要性はますます増大していきます。同時に地域の健康づくり活動に参加することで、社会参加が促される効果もあります。

北須磨支所管内はいわゆるオールドニュータウンで高齢化が進んでいますが、地域での健康づくりや見守り活動など様々な活動が行われ、元気な地域が多くあります。地域の医療、福祉関係者のご尽力もあるでしょうし、なによりも地域のリーダーの皆さんの日常の活動が元気な地域をつくっているのではと思います。そういったリーダーの活動を支援することも行政の役割ですし、須磨区でも引き続き力を入れていきます。北須磨支所管内は都市における高齢化という点で、全国平均より進んでいる地域です。この地域での様々な試みが、今後、高齢化が進む他の地域での課題解決の手がかりになるのではと思います。



北須磨地区の位置

コラボ教育での学び ～COC 事業による私たちの地域とのつながり～

神戸市看護大学 2 回生 島田和史

COC事業が本格的に始動した2014年、私は様々な場面で神戸市看護大学の学生としてCOC事業活動に参加してきました。その中でも最も印象深く、学びを得られたのは看護技術を学ぶ講義とCOCとのコラボ教育でした。

その講義では血圧や脈拍、筋肉や骨格系、呼吸関係の測定を学生同士が患者役、看護師役になって練習をしており、講義の最後にそれらの測定をCOC事業として地域の方々に実施するためにそれぞれ真剣に練習しました。学生同士で患者役、看護師役がそれぞれ何をするのか知った上で行うのとは異なり、実際に地域の方に実施してみても自身の知識不足や力不足がはっきりとわかりました。まず私が感じたのは意識の違いでした。自分たちは演習ということ意識していたためか、地域の方々に看護行為を実施することそれ自体が目的になっていました。しかし来られる方々は皆測定値が出ると、その測定値は何を示しているのか、自分たちの健康状態はどうなのかということを知りたがっていました。測定することが目的となっていた私にとってこの質問に的確にこたえることはできませんでした。

血圧や脈拍、呼吸数は年齢や持病によって基準値が異なります。そのため、ある人の血圧や脈拍を測定して、その値が年齢での基準値より高くても、その人が高血圧なら普段と比べて低いのかもかもしれません。そのように思考し、その人に合った答えを出すには自分の持っている知識では足りなく力不足を感じました。このとき自分は自分たちが講義を通して学んでいることと自分の意識との違いに気づきました。まだ自分は看護という専門分野に触れて日も浅いですが、このように自身が学んだ看護技術を一般の方々に対して行えるということは、非常に貴重で有益な経験だと感じる事ができました。



基礎看護技術演習Ⅲ

2人1組となり、住民さんの健康測定を実施（筆者は左端）

COC研究ひろば 第1回 ～大学、地域、行政が協働ですすめるコミュニティケアづくり～

神戸市看護大学 学長・地域連携教育・研究センター長 鈴木志津枝

地（知）の拠点整備事業（Center of Community, COC）「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」事業がスタートして2年目を迎えています。これまで、神戸市看護大学は、地域住民や自治体と協働して、神戸市が掲げている「訪問看護人材の育成」「医療連携の強化」「地域ケアシステムの構築」「地域住民ネットワークの構築」という4課題の解決に向けて、さまざまな教育、研究、地域貢献活動に取り組んできました。その結果、地域住民の暮らしに対する学生の関心の高まりや学習意欲の向上、コミュニティケアに関する教員の理解の促進、地域住民の健康への関心や意識の向上など、学内外や地域社会等への波及効果が広がり、学内の教職員のCOC事業に対するモチベーションも高まっています。

ここで、コミュニティケアや多職種連携に関するCOC共同研究について紹介したいと思います。今年度から、本学の教員とコミュニティケアに関わる保健・医療・福祉従事者等と共同で、8つのCOC共同研究が進行しています。研究テーマは「参加型評価手法による徘徊ネットワーク事業評価と事業評価ベンチマークシステムの開発」「継続看護を可視化する在宅支援室の体制構築に向けたニーズ調査と在宅支援事業案の作成」「須磨区多職種連携の充実と組織化に関する研究」「健康づくりリーダー支援事業を通じた住民間ネットワークづくりとその評価」「終末期患者の家族・遺族支援プログラム開発に関連した評価研究」「強い心理反応や精神症状を有する利用者や家族の対応に困難を感じる訪問看護師への支援体制の検討」「委託型地域包括支援センターに対する『地域診断』研修の評価」「認知症の高齢者と家族が地域で暮らす力を獲得していく過程と支援のあり方の検討」です。これらの研究を通して、神戸市が掲げている課題の解決に向けた提案ができると考えています。



大学図書館 COC コーナー

活 動 予 定

1月

まちの保健室
「こころと身体の看護相談
ーリラクゼーションー」
(参加無料/先着15名/要予約)

22日(木) 午後2時～4時

於：北須磨文化センター
(市営地下鉄 名谷駅)

3月

まちの保健室
「こころと身体の看護相談」
(参加無料/個別/要予約)

11日(水)
午後1時半～4時40分

於：ユニティ
(市営地下鉄 学園都市駅)

2月

第1回 COC市民公開講座
「共に学ぶコミュニティケア」
(参加無料/定員200名)

28日(土)
午後1時半～4時半

於：須磨区役所多目的会議室
(市営地下鉄/山電 板宿駅)

COC事業以外の 大学関連事業

国際フォーラム
2月21日(土)
午後2時～5時
於：ユニティ
(学園都市駅)

お知らせ

第1回 COC市民公開講座の開催

本学COC事業の4つの取り組みの一つである「地域コミュニティの育成支援」活動の一環として、地域住民に向けて地域でいきいきと安心して暮らしていくために役立つ講座を開催します。2014年度のテーマは、「共に学ぶコミュニティケア」です。第一部では、沖田裕子氏(大阪市社会福祉研修・情報センター)を講師としてお招きし、「地域において認知症の方とどう向き合うか?」についての特別講演、本学COC研究、須磨区の地域ネットワークづくりについての報告を行います。第二部では、本学学生と民生委員さんのリレートーク「官学民協働のコミュニティケア」を行います。ぜひ、この機会にご参加ください。

COC編集部門のつぶやき

高倉健さんが亡くなりました。以前、「コミュニケーション論」の授業で映画「幸せの黄色いハンカチ」を教材として使っていました。直接的な言葉に抛らない気持ちの伝え方、状況把握のヒントの提示の仕方などを、映画に見入ってしまわずに、冷静にピックアップするようにと指示するものの、ラストの溢れる思いを託した満艦飾のハンカチに思わず一同、感動してしまうというキラー映画でした。「一生懸命、辛抱してやっていたら、きっと良いこともあるよ」ということばを渥美清が演じる警官が高倉健の演じる出所したての主人公にかけるところがありました。そんな気休めを言うなと思わざるを得ない昨今の世情が残念ですが、あきらめてはいけませんよね。さて、このニュースレターではCOC事業についてお知らせするとともに、COCをきっかけに、世代、立場、地域を越えて交流可能な紙面上の広場(フォーラム)も提供したいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

(COC編集部門・SF)

発行所： 神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地 TEL：078 (794) 8080

問い合わせ先：kangococ@tr.kobe-ccn.ac.jp

平成26年度 第234号-1(広報印刷物規格 B-1類)



市看×いちかん ちいき通信 2015年 春号 2015年3月10日 発行

今号の内容



- P1. ・ 平成26年度COC事業の
振り返り
・ COCコラボ教育
ピックアップ
- P2～3. COCフォーラム
・ 地域の顔
(菅の台地区 大角喜一さん)
・ 行政の地域づくり・
健康づくり
(須磨区保健福祉部
谷真行さん)
- ・ コラボ教育での学び
(編入4年生 三浦麻美)
・ COC研究ひろば 第2回
(老年看護学 清水昌美)
- P4. 活動予定

“いちかん” (い) 一緒に、(ち) 地域づくりについて、(かん) 考える をコンセプトにしています。

平成26年度COC事業の振り返り

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター運営委員長 石原逸子

平成26年度に2年目をむかえたCOC事業は、「地域住民の皆様と共に創るコミュニティケアの拠点づくり」をめざし、北須磨地域の地域福祉センターを中心にコラボ教育を実施しました。

COCコラボ教育の授業科目で一番大きな学外演習は、基礎看護学技術演習Ⅲ（以下技術学演習Ⅲ）です。当初より、95名の学生を学外演習させることについて地域の受け入れキャパシティはどうか？という懸念はありましたが、日頃より地域福祉センターで地域の活性化を目指していらっしゃる民生・児童委員の方々のご協力いただき、1グループ8名に分かれ、12回、2つの地域福祉センターでヘルスインタビューと健康測定を実施する運びとなりました。その結果、北須磨の2地区で延べ253名の住民の方々が教育ボランティアとして本学の教育に参加・ご協力いただけました。

技術学演習Ⅲは、住民の方々の暮らしを健康の観点から理解すること

を目的としています。住民の方々は、自分たちにより近い存在である2年生の学生たちに気軽に質問を投げかけ見守る態度で接して下さいました。一方、学生たちは、このような住民の方々とやり取りを通じて初めて課題達成だけを目指していた自身の態度に気づき、住民の方々のニーズは別にあることを知り、看護とは何をする人なのかを学ぶ機会を与えられました。このようなコラボ教育の学びを皮切りに、より地域での暮らしを意識した看護の実践について学べる機会を3年生、4年生の実習ではCOC科目として準備しています。

本事業では、知識や技術力を高めれば高めるほど市井の人から遠ざかる専門職者ではなく、地域の人々の暮らしを常に思い起こせる看護人材の育成を目指しています。その為には、来年度も学外でのコラボ教育を本年度以上に充実させ、学生たちがより住民の方々の気持ちに気づけるような環境づくりに努力したいと思っています。

COCコラボ教育ピックアップ～2014年冬「健康生活支援学実習」～

健康生活支援学実習は、地域の人々の生活を理解し、健康な生活を支援する能力を育成することを目的とし、平成19年度より実施されています。9月に病院での「基礎看護学実習」を経験した2年生が、ここでは小グループに分かれ地域に出向き、地区の特性を知る「地区探索」を行ったり、「教育ボランティア」としてご登録いただいた住民の方を訪問し、健康や暮らしに関するインタビューを行います。これまで西区で実施していた実習を今年度よりCOC事業の開始にともない、須磨区竜が台地区、菅の台地区においても実施しました。写真は須磨区において地区探索をしている様子です。自分たちの住んでいる地域以外の場所を実際に歩き、見て、聞いて、五感を通して知ることにより、COC事業が目指す「地域の暮らしを理解できる看護師像」に大きく近づいたのではないのでしょうか。

(神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター准教授 相原洋子)

COC 事業に期待

菅の台地区民生委員児童委員 会長 大角喜一さん

民生児童委員は、同じ地域住民として個々人が抱えている健康・福祉に関する悩みなどの相談や「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けたい」など高齢者が望む周辺環境を整えるお手伝いなどの仕事をしています。そして、それらを通じて得られた地元の情報や要望をあんしんすこやかセンターや専門職集団および行政に繋いでいきます。その際に当惑するのは、立場の違いや守秘義務の壁、制度のはざま等に撥ね返される場合が時々生じることです。

昨年COC事業の4つの取り組みをお聞きし、これこそ住民の願いを実現するのに不可欠なソフトインフラの整備充実事業だと嬉しくなりました。

私達が依頼されたのは、学生に住民の暮らしを理解してもらい医療・福祉連携の大切さを肌で感じてもらう演習の場での住民参加でした。しかし、私には血圧、体脂肪、骨密度測定でどれだけの人が集まってくれるのか不安でした。そこで毎月のふれあい給食会（参加者60～70人）を利用して実施したのです。

そして驚いたのは、何時もは食事が済むと直ぐに帰る方々が、食事跡を片付け測定器具を準備するまで待ってくれ、その後も楽しそうに話をしている姿でした。改めて人々の健康志向の強さに驚かされました。

今年も5月から演習が始まりますが、その際には、超高齢化社会に必要な人材教育のお手伝いになることも伝えて、幅広く参加を呼びかけたいと考えています。

どうか神戸市看護大学が今求められている貴重な人材育成の拠点として発展されますよう期待しております。

【地域が創る「須磨」のまち

須磨区保健福祉部長 谷真行さん

私たちのまち「須磨区」は白砂青松の須磨海岸、須磨アルプスなどの自然環境に恵まれ、平安貴族や源平合戦などの歴史・文化の史跡も多く、旧市街地とニュータウン、農村地域といった多様な面をもつ魅力あふれるまちです。

そしてこの地に息づく人たちは、「自分たちのまちは自分たちでよくしていこう」といった気概にあふれ、各地域では自治会、婦人会、ふれあいのまちづくり協議会、民生委員児童委員協議会など各種団体が主体となって、自主的な活動により子育て支援、高齢者の見守り、障がい者の活動支援、夏まつりや餅つきといった地域行事に取り組み、住民どうしが交流し支えあい助け合いながら暮らしています。

そのようななか、昨年5月の日本創生会議において、須磨区が神戸市内で唯一「消滅可能性都市」（少子化や人口移動に歯止めがかからず、将来に消滅する可能性がある自治体）と位置付けられました。今後少子高齢化が一層進むことはある程度やむをえませんが、「消滅」はいただけません。

これからの須磨区を若い世代が住まうまちにするとともに、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の構築が求められています。行政としても地域とともに取り組んでまいりますが、とりわけ今の地域に不足しているのは「若い力」です。神戸市看護大学の地域活動への協力・参画は活動の担い手のみなさんにも参加されているみなさんにも大きな刺激となり、活力となっています。これからも一層のご支援ご協力をお願いします。



基礎看護技術演習Ⅲ

給食ボランティアのみなさんと。

（筆者は一列目中央右）



すまぼう

須磨区マスコットキャラクター

学生の視点からみた地域づくりとは

神戸市看護大学 編入4年生 三浦麻美

神戸市看護大学では一年間を通じて市民講座やボランティア活動への参加の募集があり、地域が行っている地域づくり活動や、大学と地域とが協働して行う健康教育への取り組みに学生が参加する機会があります。私はニュータウンが抱える課題に以前から関心があり、昨年、西神ニュータウン研究会の催しである「ふるさととはニュータウン！魅力アップ人・縁卓会議」に参加しました。この会議は、ニュータウンの課題の再考とニュータウンの活性化に向けた活動の一環としての催しで、参加者は20代から80代まで、ニュータウン研究会やシルバー人材センターの方々、大学生、コミュニティ農園やJAZZクラブをされている方、市の職員、大学教員など多彩な方々が集まっておられました。会議では、参加者が西神ニュータウンの目指すふるさと像をあらわすキーワードを各テーブルで話し合い、アイデアを出し合いました。最終的には、『おしょうゆ貸して！』がキーワードとして選ばれましたが、各テーブルに共通してみられた”お互い様と助け合える地域にしたい”という思いが込められています。

地域づくりという自分にはできない大変なことから考えていましたが、話し合っただけで共通のふるさと像を作っていく過程や地域で行われている活動を知る中で、地域に暮らす1人ひとりが地域づくりを担っているのだと感じました。さらに、私は今回の体験で、住民の方々の考え方を尊重しながら地域の主体的な活動を引き出すことが地域看護活動においても重要とされていることを実感し、地域看護により関心を高めることができました。

地域の方々と一緒に地域づくりに参加しながら学ぶ体験は、卒業後では得られない機会だと思います。看護大学の毎日は忙しいですが、在学中にこのような貴重な機会を活用できる環境はとて有意味だと思いますので、おすすめです！



健康生活支援技術演習

地域での健康講座

COC 研究ひろば 第2回

～「もの忘れ看護相談」活動を基盤とした地域住民への支援を考える～ 前編

神戸市看護大学 老年看護学分野 講師 清水昌美

「認知症の高齢者と家族が地域で暮らす力を獲得していく過程と支援のあり方の検討」をテーマに、共同研究に取り組んでいます。本研究は、平成24年度に開設した「もの忘れ看護相談」活動と地域の保健・福祉専門職との共同研究が基盤となっています。「もの忘れ看護相談」は、本学の老年看護学、地域・在宅看護学を専門とする教員が、「専門知識を活かした地域貢献活動がしたい」という思いから、神戸市看護大学まちの保健室事業の1つとして立ち上げました。そして、開設以降、年間4回、もの忘れや認知症に関するミニ講義や個別相談を行い、リピーターを含む118名の講義等への参加と66件の個別相談がありました。

研究的な取り組みとしては、地域の専門職との事例検討会を行い、認知症高齢者とその家族への地域支援体制の構築について検討してきました。これまでの相談・研究活動を通してみてきたのは、医療にも福祉にも結び付いていない軽度認知機能障害のある高齢者やその家族が、今後の不安を抱えながら生活をしている現状や認知症の診断を受け介護保険サービスを利用しているにもかかわらず、本人や介護家族の声に耳を傾ける場が十分とはいえない現状、様々な情報が行き交う中でもなお認知症の知識を得たいというニーズなどです。そのような現状にこたえるべく、COC事業における研究では、来談者の方々の承諾を得て相談内容等をデータベース化し、個々のニーズに即した相談活動と同じ悩みを持つ人への情報発信方法について検討しています。次号では、その成果の一部をご紹介します。



「もの忘れ看護相談」のミニ講義風景

活動予定

4月

まちの保健室
「こころと身体の看護相談」
(参加無料/個別/要予約)
15日(水) 12:30 ~ 15:40
於：ユニティ
(市営地下鉄 学園都市駅)

詳細につきましては、
TEL794-8080 古谷まで

6月

コラボ教育
3日(水)「健康学習論」
於：竜が台地域福祉センター
(市営地下鉄 名谷駅)

「基礎看護技術演習Ⅲ」
於：竜が台地域福祉センター
菅の台地域福祉センター
(市営地下鉄 名谷駅)

5月

まちの保健室
7日(木)「もの忘れ看護相談」
21日(木)「いきいき糖尿病ライフ」
於：神戸市看護大学
(市営地下鉄 学園都市駅)

コラボ教育
7日(木)「健康行動論」
於：北須磨文化センター
(市営地下鉄 名谷駅)

お知らせ

平成27年度コラボ教育が始まります！

27年度のCOCコラボ教育が、5月より始まります。27年度のCOC前期科目は、「基礎看護技術演習Ⅲ(2年生)」「健康学習論(3年生)」「健康行動論(4年生)」となっており、昨年度より新たに2科目増えました。学生が地域に出向き、住民の皆様の協力を得て、健康測定やインタビュー、健康教育を実施させていただきます。教育ボランティアとしてぜひ、学生の教育にご協力・ご登録をよろしくお願いいたします。詳細な日程は、地域福祉センターに掲示予定です。

COC編集部門のつぶやき

冬が名残惜しそうに去り、木々の新芽が期待に膨らみ始める季節、皆様にも別れと出会いのいろいろな思い出が
おありだと思います。はじめて社会人になった春のこと、
企業の研究所に配属されたのですが、世界的なウイルス
学者でもあった研究所長から新人に向けて第一声「僕は、
入ってきたばかりの君たちに、どんどん出て行きなさい
とのメッセージを送る」と言われました。一瞬、どうい
うことか?と思ったのですが、「ここで通用するだけでは
いけない。世界のどこへ行ってもやっつけていける研究者に」
という熱いエールだったのです。それとともに、実験室
を飛び出して日本中や世界のウイルスの分布を調査され、
日本人の起源にも迫る研究をされた所長は、研究室や専
門の狭い世界のみに関心もせず、絶えず外に広がり
のある視点を持ち行動することも言っておられたのでし
ょう。もう四半世紀近く前のこと、いささか牽強付会ですが、
学生が学外でいろんなことを感じ、糧にしてくれたら
いいと思います。
(COC編集部門・AF)

発行所： **神戸市看護大学**

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地 TEL：078 (794) 8080

問い合わせ先：kangococ@tr.kobe-ccn.ac.jp

平成26年度 第234号-2 (広報印刷物規格 B-1類)

看護学生の地域志向性を高めるための 早期教育のあり方に関する検討

相原洋子、石井久仁子、加藤憲司、石原逸子

神戸市看護大学

背景

- 地域包括ケアシステムの構築において、医療・保健と生活を結ぶ、看護職者の役割はきわめて重要である。
- 地域での多様なニーズに対応できる看護職の人材育成において、早期から地域志向性の高い教育が求められる。

目的

地域看護学・在宅看護学実習を受講する前の看護学生の、地域保健医療の知識と地域への愛着や地域貢献活動の関心との関連性を検証する。

方法

- 対象者：A市B大学に在籍する学部学生全員に調査を実施。分析は、地域・在宅訪問看護学実習を受講する前の1、2年生113名とした。
- 調査方法：構成的質問紙を用いた、無記名自記式調査を実施した。看護専門科目以外の一般基礎科目講義後に調査票を配布し、事務局に回収箱を設置し回収を行った。
- 調査期間：2014年1月
- 変数
 - 1) アウトカム：A市保健医療（高齢化率、保健福祉政策、保健医療福祉資源）の知識。4件法（「全く当てはまらない=0点」「あまり当てはまらない=1点」「やや当てはまる=2点」「とても当てはまる=3点」）の回答の合計点（0~9点）。
 - 2) 関連要因：①地域への関心（大学のあるA市への関心、愛着、ボランティア活動の参加意欲と経験）、②B大学が実施している地域貢献活動に関する知識。
 - 3) 交絡要因：基本情報（学年、現在の居住地域、居住年数）。
- 分析方法：学年間のアウトカムの違いについては、Mann-Whitney U検定、関連性の検証は、重回帰分析を行った。

結果

- 保健医療知識の平均点（標準偏差）は、1年生：1.8（1.6）点、2年生：2.1（1.6）点（ $p=0.32$ ）であった。

表1. 地域への関心・愛着、大学の地域貢献活動の認知度と保健医療知識（重回帰分析による）

| | 全体 (n = 113) 標準化係数 (標準誤差) | 1年生 (n = 63) 標準化係数 (標準誤差) | 2年生 (n = 50) 標準化係数 (標準誤差) |
|--------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 地域への関心・愛着 | 0.32 (0.07)*** | 0.20 (0.11) | 0.45 (0.99)*** |
| 大学の地域貢献活動認知度 | 0.25 (0.11)** | 0.32 (0.15)** | 0.06 (0.18) |
| A市居住年数 | 0.05 (0.10) | -0.0002 (0.14) | 0.17 (0.14) |
| 学年 | 0.09 (0.34) | | |
| 調整済み R^2 | 0.17*** | 0.12* | 0.26** |

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

考察

- 地域における保健医療の知識・理解を深めていくうえで、早期から地域学やボランティア学といった科目の受講を促していくことが重要である。
- 大学の地域貢献活動に、学生を導入していく活動を促進していく必要がある。
- 今後、早期学年から地域で実施する科目を増やしていくことで、保健医療知識、地域資源の理解度の向上がみられるか検証していく必要がある。

謝辞：本調査実施にあたっては、神戸市看護大学COC評価部門メンバー（松葉祥一教授、山根木加名子教授、渡邊定博教授、丹野恵一講師）の協力をいただいた。



2013年度秋に文部科学省COC（「地（知）の拠点」）整備事業に本学の計画大学と地域の連携がおりなすCOC事業について続報として特集しました。

コミュニティケアの拠点づくりに向けた始動の年

相原 洋子（地域連携教育・研究センター 准教授）

1. 2年目を迎えたCOC事業と今後の展開

前号にあたる『回廊』第11号において、本学が平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備（COC）事業」に採択されたこと及びその事業概要についての記事が特集されました。2年目にあたる今年度は、まさに始動の年であったといえます。今回はその続報として、本格始動したCOC事業について報告します。COC事業ではこれまで本学が実施してきた「コラボ教育」を、学生が地域に出て住民に参加いただく内容とする科目を追加、学部1年から4年生まで継続的に導入するといったカリキュラムの変更を行いました。学生が地域に向向くことにより、「卒業生全員が地域住民の暮らしを理解できる」とことと「住民の方がコラボ教育に参加することにより、地域における健康づくりのリーダー育成の支援」という、本学COC事業の目標達成を狙いとしています。

しかし初めての地域で大学から出向いて行う授業というのは、これまで本学が築きあげてきた「コラボ教育」のノウハウをもって、すんなりと事が運ぶというものではありませんでした。COC事業では市内でも高齢化率の高い北須磨地区を対象としています。今回初めて学生を受け入れるにあたり、地区の行政関係者、民生委員さんはいろいろな不安を抱えてのスタートであったと思います。民生委員さんからは、「当初、本当に授業が成功するのか不安だった」という声も聴きました。とはいえ、おかげさまで初年度の北須磨地区でのコラボ教育には、延べ306人の住民の方が教育に参加くださいました。今年度は1、2年生開講の4科目の実施でしたが、来年度は3、4年生開講の3科目が新たに加わります。参加いただいた住民さんからは、「学生さんが優しく接してくれた、真剣に話を聴いてくれたことに感激した」、また「今後地域医療に関心を持てる看護師になってほしい」と期待を膨らませる声をいただきました

た。学生の皆さんは、どのような感想を持ったでしょうか。将来看護師として働く中で「あの時の経験が役立った」と言える教育となってほしいと願います。

2. 地域への愛着と関心が実を結ぶもの

先に述べたコラボ教育では、地域に向向く科目が1年生から導入されています。これは他の看護系大学と比べても早期から地域志向を目指したカリキュラムといえます。今年始動したCOC事業では、早いものでは1年生の前期（5月）に地域での授業が取り入れられました。早期に地域に出ることにより、地域に目を向ける機会も増えたのではないのでしょうか。さらにCOC事業が本格始動する前の平成25年度に実施したCOC事業に関する評価からも、興味深い結果が得られました。

この評価は平成26年1月に実施され、300人の学生（学部生、専攻科生、大学院生）から回答をいただきました。その中から健康生活支援学実習など地域で行う科目が始まる前の1、2年生113人を対象に分析を行いました。地域の保健医療の知識として、神戸市の「高齢化率」「保健医療施策の特徴」「保健医療福祉資源」について「知っている」という問いをし、自記式で「とてもあてはまる（3点）」～「全くあてはまらない（0点）」の回答の合計点をアウトカムとしました。神戸市への愛着・関心・ボランティア活動への関心や参加の有無、さらに本学が行っているまちの保健室の認識に関する回答を得点化したものを説明変数としました。結果は下の表に示すとおりです。

この結果の見方は、係数が正の値だと正の相関、負の値だと負の相関があることを示します。つまり神戸市への関心や愛着が高い人ほど、神戸市の高齢化や保健医療に関する知識が高いという解釈になります。また事象が偶然起こりうる確率（p値）で示しているように、その相関は統計学的に有意という結果が

表. 地域への関心・愛着、大学の地域貢献活動の認知度と保健医療知識（重回帰分析による）

| | 全体 (n = 113) 標準化係数 (SE) | 1年生 (n = 63) 標準化係数 (SE) | 2年生 (n = 50) 標準化係数 (SE) |
|--------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 地域への関心・愛着 | 0.32 (0.07) *** | 0.20 (0.11) | 0.45 (0.99) *** |
| 大学の地域貢献活動認知度 | 0.25 (0.11) ** | 0.32 (0.15) ** | 0.06 (0.18) |
| 神戸市居住年数 | 0.05 (0.10) | - 0.002 (0.14) | 0.17 (0.14) |
| 学年 | 0.09 (0.34) | — | — |
| 調整済み R2 | 0.17 *** | 0.12 * | 0.26 ** |

* p 値 < 0.05, ** p 値 < 0.01, *** p 値 < 0.001

COC整備事業：続報

が採択され、初年度を過ぎ、今年度は多くの事業が本格的に実施されました。

得られました。横断調査なので因果関係が不明確であり、知識を自己評価しているといった限界を考慮する必要があります。しかしこの結果から、神戸市のことや大学が行っている地域貢献活動に目を向けることが、コミュニティケアの理解につながる一歩になるのではと考えました。2014年のノーベル平和賞受賞者のサティヤルティさんとマララさん両氏が語るように、

社会問題の解決は関心を持つことが大切です。学生の皆さんには、早期学年から開講されている神戸学やボランティア活動といった科目の受講を通して、まずは神戸市やボランティア活動について知ることから始めていただき、そして神戸市の健康課題解決にむけたアイデアの枝葉をたくさん広げてほしいと思います。

官学民の協働の力で紡ぐ「安心のまちづくり」

～サテライトルーム開設で広がる可能性～

石井 久仁子（地域連携教育・研究センター 助教）

COC事業が本格的に始動し、北須磨地区においてコラボ教育やコミュニティ育成支援事業などさまざまな取組みがスタートしました。北須磨地区はS50年代に神戸市が開発したニュータウンですが、30～40年の時を経て住民の高齢化が進み、中には高齢化率40%を超える地区もあります。神戸市看護大学はCOC事業を通し、高齢化に伴う諸課題に対して「継続看護教育の強化」「訪問看護の教育強化」「多職種連携の充実と組織化」「地域コミュニティの育成支援」の4つの取り組みを行っています。本学はこれまで大学が立地する西区においてさまざまな事業を展開してきましたが、COC事業では須磨区にエリアを拡大し、従来の活動をさらに進化させながら事業を展開します。事業の開始にあたっては「地域との接点」をつくるのが大きな第一歩でしたが、地区の行政担当者や民生児童委員さんをはじめとする地域代表者のご助力によって活動環境が整いつつあります。また、そういった皆様との相談や打ち合わせでは、地域との調整にとどまらず、新たな発見や事業推進に向けたヒントを頂いています。H26年はこのように事業のスタートから「官学民の協働の力」や「連携・協働の可能性」について考えた1年でした。連携・協働の第一歩はお互いを知り認識することから始まりますが、住民・行政・大学が相互に抱える課題や取り組みを共有することで共通課題が見えると同時に、相互に補完できる事柄や解決策がみえてきます。COC事業をきっかけに官学民の協働の力と可能性が広がるよう、今後も対話と検討を重ねていきたいと思います。

北須磨地区での活動にあたり、昨年9月には、学生の演習や実習、地域代表者や行政担当者との会議等の拠点として、北須磨地区の集合住宅群の一角にサテライトルームを開設しました（写真）。また、地域住民のネットワーク構築支援に向け、地域リーダーの育成支援の取り組みの検討も行っています。北須磨地区は神戸市内でも特に高齢化が高い地区ですが、60代前半

の方も多く居住しておられます。60歳代は仕事を中心とした生活から、家族や地域を中心とした生活へとライフステージが移行する時期であり、人生の熟成期です。そういった住民が、これまでの人生の中で醸成してこられた豊かな経験と能力を地域の中で活かしていただければ、地域の活性化やご本人の自己実現につながります。一方、仕事をリタイアされたばかりの方々からは「地域との関わりが少なく、活動したい気持ちはあってもきっかけが見出せない」という話をよく聞きます。本学COC事業では、サテライトルームを活用して、地域で活動する仲間づくりのきっかけにつながる支援ができるのではないかと考えています。一例として大学教員による人数限定の講座「地域ゼミナール（仮称）」が考えられます。地域ゼミナール（仮称）を通して、住民に仕事中心の時代には興味があってもできなかった学びや、これからの人生をより豊かにするようなテーマについて学んでいただき、その集まりが地域での新たな活動のきっかけになれば、地域に潜在する人的資源を活かすことができます。小さなサテライトルームですが、住民の多様な知識と能力、官学民の協働により、いろいろな可能性が広がります。小さな取り組み、小さな協働作業を重ねながら、「安心の街づくり」を紡いでいけるよう、取り組んでいきます。みなさまのご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



サテライトルーム開設式の様子（H26年9月26日）

COC事業計画

COC事業
補助期間終了

| | 25年度 | 26～29年度 | 30年度～ |
|---------------|------|---|---|
| 地域連携教育・研究センター | 設置 | 運営会議 26年度からは年2回（7月と1月に実施） | コラボセンターに 改変して継続 |
| 地域貢献 | 実施計画 | <p>年1回 シンポジウム、COC報告会、看護専門職講座の開催</p> <p>最終年度 フォーラム</p> <p>月1回 まちの保健室、こころの看護相談などの開催</p> <p>年4回 ヘルスアップ講習会の開催</p> | <p>内容を一部 変更して継続</p> <p>これまでどおり継続</p> <p>これまでどおり継続</p> |
| コラボ教育・実習 | 実施計画 | <p>コラボ教育の実施 （年度末に、評価を行い次年度の実施計画を作成）</p> <p>実施計画 一部を須磨区へ拡大</p> <p>継続看護、訪問看護等の関連科目、実習の実施</p> | <p>一部撤退して 継続</p> <p>すべて継続</p> |
| 研究支援 | 研究募集 | <p>COC共同研究助成（3件/年）</p> <p>地域診断研修、認知症徘徊ネットワーク事業の評価研究</p> | 大学研究費や 科研で継続 |
| その他 | 実施計画 | <p>家族の終末期患者の看取り体験を語る会の設立と研究</p> <p>認知症患者を介護する家族が体験を語る会の設立と研究</p> | 大学研究費や 科研で継続 |